ブログによるプロジェクト評価

上田和子

〔キーワード〕日本語でケアナビ、Webサイト開発、ブログ、記述、評価

〔要旨〕

関西国際センターによる「こちら『日本語でケアナビ』開発室」は、Webサイト「日本語でケアナビ」開発過程を、ブログによって多角的に記述する試みである。ブログという媒体、「語り」というスタイル、関わった複数の人々がひとつの出来事をそれぞれの視点から描いていくことなど、仕事の記録、報告の手法として実験的な試みと言える。同時に、それはプロジェクト評価としての機能も果たしている。この実践により明らかになった点として、以下が挙げられる。

1）「日本語でケアナビ」開発は、開発者ら日本語教師の日常的な学習者との関わりや、研修事業運営の経験に深く影響を受けている。

2）詳細なエピソード記述には、サイト開発の問題点、ねらい、開発者の思いなど、プロジェクトの核心が記録されている。

3）ブログに関わらず、「仕事の場の記述」や「語り」が評価として実践されるには、プロジェクト内での業務として位置づけが必要である。

1．プロジェクトの実践、仕事の記述からブログへ

「日本語でケアナビ」は、2007年７月より国際交流基金関西国際センターが開発し、インターネット公開している日本語教育支援データベースである[(1)]。和英・英和辞書機能を有し、看護や介護の基本的な専門用語を含む語彙や表現約8,200語、例文約4,400件からなる。アクセス数は、公開後の約１年間に世界130以上の国・地域から70万件を超える。「日本語でケアナビ」の元となる「看護・介護のための日本語教育支援データベース」開発と、「Webサイト日本語でケアナビ」開発については、すでに別の機会に報告した[(2)]。これらには開発の経緯、目的、方法、結果などがまとめられており、プロジェクトを〈Plan-Do-See〉的に記述し評価する報告書としての一定の役割は果たせたと考えられる。

本プロジェクトのデータベース作り、Webサイト開発、その公開へと至る変遷は決して単一線上で進んでいったものではなく、開発過程のどの局面でも複雑な問題に直面し、判断に窮することが多くあった。その理由として特に２点、日本語教師である開発メンバーのITリテラシー不足と看護・介護分野についての絶対的な知識不足が挙げられる。看護や介護といった専門職に就く人が使うwebサイト開発するには、どのようなIT知識や感覚が必要なのか、そ

れを日本語教育の文脈でどのように扱うのか、といった議論がプロジェクト着手当初から繰り返された。そこから、技術的な問題については専門家に解決を託し、一方で担当者１人ひとりがITや介護について学びつつ、コンテンツ開発を進めていったのである[(3)]。

我々開発メンバーは何とか困難を切り抜けてサイト公開へと至ることはできた。そして、開発の体験を通じて何らかのノウハウを蓄積していったという実感はあったし、その経験にはある種の「価値」があることも直感していた。しかし、漠然と「貴重な経験をした」という思いはあるものの、具体的にそれが何かはっきりと言うことはできず、さらに「日本語でケアナビ」が世の人々にどの程度受け入れられるものであるかという点に至っては、不安ばかりという状態だった。

「日本語でケアナビ」のプロジェクト評価としては、アクセス解析によるユーザーの利用状況について数値的データを得ており、またその分析、評価は別途行っている（角南2008）。しかし、筆者は開発担当者と報告書作成者という両方の立場から、それとは別に開発現場で繰り広げられた出来事を、日本語教育関係者やサイト開発に関わる人々に公開する必要性を感じていた。それは「開発の当事者自身によるもうひとつの事業評価」として意味づけ公開されるものである。この評価には以下の３つの目的がある。

１）何人もの開発者がそれぞれの立場から参加し協働的に行ってきた「日本語でケアナビ」開発２年間の経験の実態を明らかにすること

２）開発担当者がどのように考え、どのような作業を行い、成果をあげてきたかの過程を描くことで、「日本語でケアナビ」のノウハウとは何であるかを具体的に検討すること

３）「経験を記述する」ことにより、得られるものは何かについて考察すること

以上を検討するためには実際に行われた仕事、出来事を記述する必要がある。それがはたして評価につながることになるのか、その確信はなかったが、我々には、「実践者による仕事の場の記述願望（鯨岡2005：３−12）」があった。これは後述する。

仕事の記述による評価の手がかりとして、まず開発担当者６名は、２年間の仕事を振り返る話し合いの機会を持った。そこで明らかになったのは、我々は開発過程で多くの経験をし、結果を得てきたが、なぜそうなったのかという問いに即座に答えるには、すでに記憶が薄れているという問題だった。特に「開発のノウハウとは何か」というような問いに答えられる明確な形で残っているものはあまりなかった。ただ、同僚の話を聞いていると思い出せることも多く、語り合うことの意義は強く認識した。また、時間を追った記述をすることや、出来事ごとに関わった人々が語り合うことで経験を再構築することが可能であるという手ごたえは得られた。

2007年10月、サイト公開後３カ月を経た時点で、開発チームは、「こちら『日本語でケアナビ』開発室（以下、「開発室ブログ」とする）」というブログをインターネット上で公開した[(4)]。以降、2008年９月現在もそれは継続して公開されており、開発過程で日常的に繰り広げられた

仕事の場での経験が、各語り手の個性を活かしながら記述されている。「開発室ブログ」は、ブログという媒体、「語り」というスタイル、関わった人々が一つの出来事を多声的に描くという手法、さらにプロジェクトに関わった開発室のソト（関西国際センター外部）の専門家らの参加など、ひとつの仕事を記録、報告する手法として、筆者にとってこれまで１度も行ったことのない実験であった。本稿は「開発室ブログ」の実践から、多声的な語り、すなわち複数の語りによるプロジェクトの記述、振り返り、さらに実践者間の相互作用について報告し、この手法のプログラム評価としての可能性について検討する。

2.「開発室ブログ」公開まで

2.1　プログラム評価としての記述

社会の中で実践されているプログラムの意義や価値を検討し評価する目的は、いうまでもなくそれらが受益者にとって正当に実施され妥当な成果を上げているか、ということを証明することにある。これらはしばしば第三者から査定を受ける形で実施され、多くは数値的な評価を伴う。

一方、グリーン（2006：367-384）によると、社会的プログラムの評価には、特定のサービスやプログラム事業を教育や福祉など、それが行われる文脈において検討し明らかにして改善することを目的とする立場があるという。その手法にはケース・スタディ、自由回答形式のインタビューや観察、ドキュメントのレビューなどがあり、それによって「当該プログラムがさまざまな利害関係者によってどのように経験されているのか、どんな点で意義があるといえるのか」という視点から、個人的経験や文脈を理解し、評価を行うという。これは解釈主義、構成主義的な認識論に基づく評価の立場である。「日本語でケアナビ」に必要な当事者評価とは、まさにこの視点を援用した記述によるプログラム評価である。その実践のためにはどのような手法が相応しいのか、筆者らは、まずそれを探ることから始めることになった。

2.2　ブログという媒体あるいは手法

開発の場にあるノウハウとは何か、それを探求するための記述をどのような手法で行うべきか、と思いをめぐらしていた時に出会ったのがブログである。当時の筆者の心境を「開発室ブログ」から引用する（事例１）。

事例１：理論というナビゲータ：「ブログの目指すもの(1)」より抜粋

> 前年度と同じように「報告書」を書くこと、私にはそれが気になりました。しかし、初年度と比べて２年目は、作業内容の質と量がうんと増えて複雑になっています。分担執筆という方法もありますが、それが現実的とも思えませんでした。しかし、サイトを開発して

いった過程には多くの知識と情報がありました。何も書かないのはあまりにももったいない。かといって、私一人で書ける内容ではなくなっています。一人で書いたとしても、実態を報告しきれるだろうかという不安もありました。
「報告書、どうしようか」
私がそうつぶやいたとき、
「ブログなんかどうです？」
という声が聞こえてきたのです。
「ブログ？」
ブログを書く、という提案に一瞬とまどいがありました。がすぐに
「そうか一人語りではなく、複数の声で描くということね」という思いが浮かびました。

ブログとは日記風に書かれた個人のホームページのことである。「ブログを公開するための技術的発展を受けて急激に『総表現者社会』が出現した」という指摘がある（梅田2006）。ブログは個人の日記としてだけでなく、数人のグループや企業によっても公開されている。また内容としては時事ニュースや専門的トピックスに関して自らの専門や立場に根ざした分析や意見を表明したりする点で、単なる日記サイトとは区別されるという（IT用語辞典）。人が何かを表現するための手段としてブログが登場し、その「量が質を超える」形で進化し続けているという点には「情報は囲い込むより開放することによって進化する」という思想があると言えよう。

「開発室ブログ」はもちろん個人の日記ではなく、あくまでも「日本語でケアナビ」というプロジェクトがどのように進んできたか、ということを描くのを目的としている。ブログという媒体を用いることで、記述したものを発信するだけでなく、記事を読んだ読者からの反響を受けること、さらにそれに応えることの双方向の働きが可能になる。このような判断に基づくと、「開発室ブログ」に取り組むことによる成果として、以下の点が期待できた。

1）「日本語でケアナビ」プロジェクトそのものの記録
　・「看護・介護のための日本語教育支援データベース開発」の背景
　・「『日本語でケアナビ』のシステム・デザイン開発」の背景
2）日本語教育の文脈での「日本語でケアナビ」開発の価値や成果の検討
3）多言語サイトや日本語教育プロジェクト開発における外部協力者との協働事例の提供
4）専門日本語教育における教材開発やサイト開発に対するノウハウの提供
5）「日本語でケアナビ」の機能の補完
　・「開発室ブログ」でプロジェクトの背景を言及することにより、読者（ユーザー）に対する「日本語でケアナビ」の認知度と理解度の促進が図れる。

・ユーザーに対して「日本語でケアナビ」の使いやすさを提案できる。

1）以外については、実際ブログを公開してみるまで、どのような効果があるのか予測できなかった。それは「日本語でケアナビ」そのものがユーザーや日本語教育関係者にどのように受け入れられるのか、ということに対する開発者の不安に由来しているとも考えられる。我々は看護や介護の専門家でもなく、またサイト開発のプロでもない。日本語教師が開発してきたものが、一体どれほどのものか、その価値認識が当事者にはまだできなかった。

2.3　アクセス解析によるユーザー利用状況

「日本語でケアナビ」に対して、開発チームのメンバーに徐々に自信が生まれ始めたのは、やはりアクセス数という数値的証拠が具体的にあがってきたころからである。試験公開の３ケ月間では約５万件、一般公開後１カ月で10万件を超え、３カ月後の９月には20万件を超えるなど、右肩上がりにその数値を伸ばしていった（角南2008前掲）。また、「問い合わせメール」にはユーザーからの反響が毎週のように届けられるようになった。改めて、インターネットというツールの影響力の大きさと速さ、そして、それによって世界各地で学習スタイルに大きな変化が起きていることを実感させられた。反響には「こんなサイトを待っていた」という「日本語でケアナビ」への率直な賞賛のほか、「こんなことはできないか」という改善への要求もあった。もちろん、スペルミスなどの指摘を受けた場合は即座に改訂し、さらにその旨を返信メールで伝えた。

自分たちが開発したものが確実に受け入れられている、ユーザーがおもしろいといってくれる、という手ごたえを実感したことが、開発者らのプロジェクトに対する自信を高めていったのは事実である。それを受ける形で、もうひとつの評価として「仕事の場を記述すること」に踏み切れたといえるかもしれない。ブログの実践というプロジェクト評価は、換言すれば「日本語でケアナビ」開発プロジェクトを日本語教師である自分たちの仕事として、日本語教育の文脈でどう受け止めることができるのか、ということへの挑戦でもあった。

3.「開発室ブログ」の時間の流れ

3.1 「日本語でケアナビ」プロジェクトと「開発室ブログ」

表１は、主にサイト公開以降のプロジェクトの流れと「開発室ブログ」の実践を、議事録を元に時系列に沿って整理したものである。これを見ると「開発室ブログ」の提案は、「日本語でケアナビ」公開直後からあったことがわかる。但し、当時は開発者間でもブログ実施についての認識には温度差があった。かなり周到な計画書（内部資料）『開発室ブログ（案）』『ブランディング提案書』にはブログの意義が記されているが、担当者すべてがその重要性を共有していたわけではなかった。それが実施へと導かれたきっかけは、国際交流基金ブログ「地球を、

表１　「日本語でケアナビ」プロジェクトと「開発室ブログ」

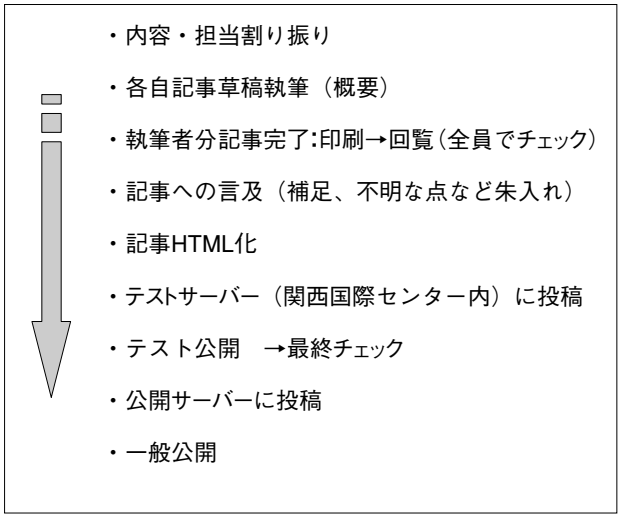
年	月	「日本語でケアナビ」関連の動き	「開発室ブログ」の動き
2005	4	「看護・介護のための日本語教育支援データベース」開発に着手	
2006	3	同データベース、完成	
2006	4	Webサイト「日本語でケアナビ」開発に着手	
2007	3	同Webサイト、完成	
2007	4	「日本語でケアナビ」内部公開開始	４．４　プロジェクトチーム内での「ブログの提案」
			４.12　振り返りのための話し合い（全員で）
			４.19『開発室ブログ（案）』作成
	5	関係者対象広報開始 ５.29　基金ブログ「地球を、開けよう。」に「日本語でケアナビ」開発秘話記載の要請あり⇒応じることに決定 その後、関係者インタビュー実施、記事作成（田中）、および「ブログ登場人物キャラクター」作成（前田）	５.14『ブランディング提案書』（角南） 「日本語でケアナビ」開発全体における開発室ブログの役割について検討
	6	６.20　関西国際センター日本語教育シンポジウム（以下、KCシンポジウム）実行委員会（第１回）でパネルディスカッションのテーマが「『日本語でケアナビ」と実践的コミュニティー」に決定[5]	
	7	７．１　「日本語でケアナビ」一般公開開始	
			７．６　「開発室ブログ」記事作成に取り掛かる
		７.18「地球を、開けよう。」に第１回開発秘話記載	
		７.20「地球を、開けよう。」に第２回開発秘話記載	７.20　KCシンポジウムとブログの目的確認
		「日本語でケアナビ」のアクセス数が10万件を超える	７.31　ブログ構築の草案：トピックの検討
	8		８.20　公開までの仕事：記事作成、ページイメージ検討
			８.27「10月公開」決定⇒記事の書き溜め
	9		９.11　公開までの作業など詳細の取り決め
		９.20　KCシンポジウム実行委員会（第２回）	９.20「開発室ブログ」公開前の報告、初回用記事仕上げ
		「日本語でケアナビ」のアクセス数が20万件を超える	９.25「開発室ブログ」テスト公開
	10		10．１　「開発室ブログ」一般公開開始
			10.18　記事作成スケジュール、バナーの検討
	12	「日本語でケアナビ」のアクセス数が30万件を超える	12．４　KCシンポジウムとブログの関わりを再確認
2008	1		１.15「開発室ブログ」記事100本達成、読者をブログからコンテンツにどうナビするか協議
	2		２.15「２年目について」の記事作成 KCシンポジウム参加者を意識した記事について協議
	3	３．８　KCシンポジウム実施	
		「日本語でケアナビ」のアクセス数が50万件を超える	３.13　KCシンポジウム後の振り返り 「開発室ブログ」の役割と評価
2008	4		４．１　「書いておくべきこと」の洗い出し。以下、進行中

開けよう。」に「『日本語でケアナビ』開発秘話を書きませんか」と誘いを受けたことだった。その時、ブログという媒体がすでに様々な分野で活用され社会的認識を得ていることに気づかされたのである。

3.2　ブログの執筆

「日本語でケアナビ」がユーザーから受け入れられているという実感を得て、「開発室ブログ」で書くべきこと、書き残しておく必要性をさらに認識し、「開発室ブログ」実施が決まった。図１はブログ記事の執筆から公開までのプロセスを示したものである。

図１　執筆から公開まで



ブログの草稿は、サイトにアップする前に全員で回覧した。チェックの視点は「このプロジェクトを知らない人が読んでも、わかるように書かれてあるか」である。この「読者にわかるように記述すること」が、ブログ実践で最も難しかった点と言える。ブログ執筆は事実を客観的に記述する報告書作成とも異なるし、また論文や報告書の文体とも異なる。プロジェクトで遭遇した困難をメンバーたちがどのように解決したのか、その時の悩みや思いを読者の共感を得られるように記述するにはどうすればよいか、何をどのように書いていけばいいのか、どのメンバーも頭を悩ませた。また、次々と記事を公開していくためには、ブログ開始時にある程度まとまった分量の記事を書き溜めておく必要もある。このような「わかりやすい記事をたくさん書く」という、質、量ともに高い要求に、執筆者らは負担を感じることもあった。当時の心境を述べた記事を引用する（事例２）。

事例２：日本語でケアナビの「いま」:「１年振り返り　こんにちは、しもんやんです」より抜粋

（前半略）それと同時に、10月公開予定のブログ執筆も走り出しました。
私が思い出せる中で、「あの頃に戻りたくない」ランキングの２位は、
このブログの執筆練習期間かもしれません。
今まで一度も「人に読んでもらうための文章」を書いた事のない私にとって、

本当に学びとヘコみの日々でした。

読者に対するわかりやすい記述を目指す一方、我々はチームのメンバーに対しても「わかるように記述すること」が容易でないことに次第に気づくようになった。さらに、記述の難しさだけでなく、同じ開発作業の場を共有してきた者の間でさえ、必ずしも仕事の内容などの情報を共有している、あるいは理解しているわけではないことも、その過程で明らかになってきた。たとえば、データベース開発の作業をしてきた者にとっては自明のことが、それに関わらなかった者にはわかりにくいことなど、事例はいくつも挙げられる。「職場で創出された仕事のノウハウを、その場の人々で共有することが、新たな価値を生み出していくことにつながる（ウェンガー他2002）」ということを理解できても、それを明示的に実践することの困難さを実感した。

ブログの記事の中には改訂が何校にも重ねられるもの、書き上げてから数週間も保留することになったものなども多く、我々は書くことそのものに苦しんだ。ただ、このような記述と校閲のプロセスを経ることによって、自分の中で経験を反芻し、それを再構成して経験の意味を明らかにすることが可能になることは実感された。そのためには、まず身近な読者であるチームのメンバーに理解されるように記述することが必要だったのである。この過程が「プロジェクトチームの互いが経験を共有するプロセス」であり、それによってはじめて自分の中にある経験の意味が外化し、価値認識へとつながることになったのである。つまり、ここで当事者による評価がすでに行われていたのである。

4．ブログで描かれているもの

4.1　ブログの章立て

表２は現在公開されている「開発室ブログ」の章立てである。それぞれの章には、その内容を説明し読者をいざなうためのリードが付けられている。

公開当初、「開発室ブログ」の章立てとして、「日本語でケアナビ」事業全体の説明、データベース開発での個別作業（語彙の選別、例文作り、タグなど）、サイトデザインや機能について等を計画していた。ブログが進むにつれ、「日本語でケアナビ」の広報活動やユーザーからの反響、開発の枠組みとなった理論についての話など、コンテンツは一層多角的になっていった。執筆者一人が担当する章もあるし（サイトデザインなど専門分野の場合）、複数の執筆者が多角的に描いているもの（データベースづくりなど）もある。同僚たちの記事を読むことで経験を共有し、それに呼応するように別の角度から同じ問題について記述することもあった。それぞれの記事に相互に刺激を受けながら、活発な記述が進んでいった。

表2　章立て一覧

章　立　て	内　容　紹　介　の　リ　ー　ド
よくわかる「日本語でケアナビ」	プロジェクト全体の流れがつかめます。初めての方はまずこちらへ。
開発スタッフ紹介	開発スタッフは超少数精鋭っていうか人が足りない！なスタッフの素顔の紹介。
「日本語でケアナビ」の今	学会発表などニュースの告知や報告、利用者からの声をお届け。
「日本語でケアナビ」と私たち	様々な人たちの関わりをどうデザインしていくか、ちょっと大きな視点でのお話。
ディレクター、かく思えり。	何をどう作るべきかをどう決めていったか、広い意味でのデザインの話。
「使える」データベースへの挑戦	それはデータベースの整理・分析・濾過。途方もない（っぽい）挑戦の記録。
シンプルで使える！な例文作り	例文作りは闘い。シンプルとは？使えるとは？そんな疑問との奮闘の軌跡。
あの機能あのコンテンツの舞台裏	便利機能は試行錯誤の末に生まれたものばかり。その開発秘話を。
デザインよもやま話	サイトのビジュアルを担当したまえちゃんが語る、デザインに込められた思い。
タグをめぐる冒険	メンバーの頭を悩ませ続ける目玉機能「タグナビ」の開発と改良のお話。
理論というナビゲータ	私たちの実践をいつも見守ってくれた「理論」というナビゲーターのお話。
シンポやりました	2008年３月に開催されたシンポジウムの報告をお届けします。
今週の例文	「日本語でケアナビ」収録の例文をテーマに、たなか画伯がお送りする小話。
脇役たちを忘れない	ハードな仕事を陰で支えてくれた、知らない人には「それが何？」なものたち。
思い出す、あの日の名言・迷言	個性豊かな開発メンバーの、これまた個性豊かな発言の記録。

4.2　読者を引きつけるための工夫：文体、イラストなど

本の読者と異なり、ブログを訪れる人は、巻頭から順を追って読み進めるわけではなく、興味を持ったコンテンツを直接読み、関心がなければ去っていく。またパソコンの画面での見やすさ、文章量などは、活字によって情報を伝える場合とは異なる。そこで、できるだけ読み手を引き付けられるような仕掛けの必要性を意識し、以下のような工夫を心がけた。

1）文体：特定の読者に語りかけるような話し言葉のスタイルを用いた。

2）文章量：画面を何ページもスクロールして読むことを避けるために、ひとつの話題についての文章は、１回に公開する量をある程度制限し、長いものは何回かのシリーズに分割した。

3）画面での配置：画面では１文の長さを短くするほうが読みやすく理解しやすい。そのため、改行を施し、画面上で「一目」で見た時の見やすさに配慮した。

4）イラスト：コンテンツの内容、執筆者のスタイルなどによって、状況理解を助けるためのイラストを加えた。イラストを用いた章では、執筆者（サイト開発者）らを戯画化したキャラクターを登場させ、次々と起こる問題に頭を悩ませたり、解決したりしていく様がユーモラスに描かれている。それにより読者に親しみやすい印象を与えることを目指した。

4.3　執筆者の個性的な記述

「日本語でケアナビ」開発は、複数の人々がそれぞれの立場からいくつもの複雑な作業に関わり展開していった。開発の場面での様々な問題点について、開発者らがどんな点で悩み、考え、苦しみながら結論を出していったのか、次の事例３からその一例がうかがえる。

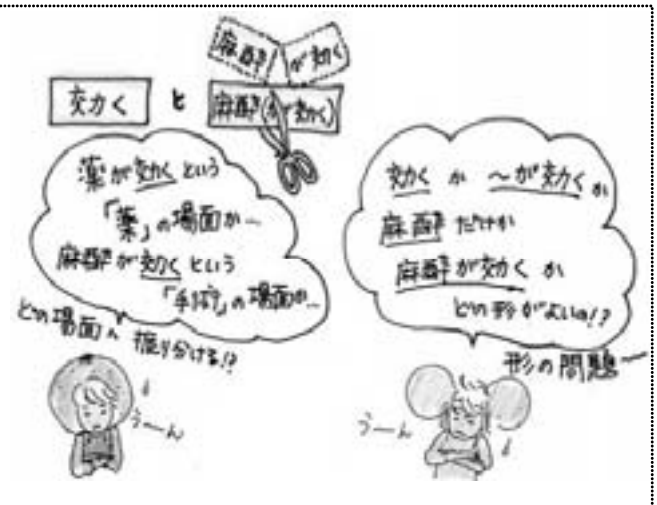
事例３：「使える」データベースへの挑戦：「集めたことばの場面わけ」より抜粋

「日本語でケアナビ」には、かなり乱暴に分ければ２種類のことばが
収録されています。
１つは「（ある程度）専門的なことば」、
もう１つは「日常生活に必要なことば」です。
医療や介護の分野について全く知らない私たちにとって、
「ことばの意味や用途を知らない」という意味で
専門用語は確かに難しかったです。「何これ？」の連続で。
しかし、ことばを場面分けするのは、そのことばが独特であればあるほど
場面が限られるため、やりやすいんです。
具体的には、
「おむつをする」……排泄介助の場面
「手術（を）する」……手術の場面
などは、あっさり分けることができました。
厄介だったのは「飲む」や「食べる」などの日常語です。
このようなことばは、様々な場面で使われる可能性があるので、
１つの場面に限定して収録するのが難しかったんです。
例えば、
「喉が渇く」ということばがあります。
このことばは
「喉が渇いたからジュースが飲みたい。」
という「飲食」の場面でも、
「最近、よく喉が渇くんです。」
と症状を訴える、「問診」の一コマでも使えそうです。
このように、１つのことばが複数の場面で取り合いになるという事態が……
しかし、何とか１つのことばに１つの場面分けをするということを目指して、
「より一般的（日常的）な意味、使い方を基準に場面分けをする」
という方針で作業を進めることにしました。

つまり、先ほどの「喉が渇く」なら飲食の場面行きです。
今なら「喉が渇く」に『飲む・食べる』『体調・症状』という
２種類のタグをつければ、何の問題もありません。
『タグ』という概念が私たちに全くなかった頃なので、
必死に場面分けをしていたことを思い出して悔しがっても仕方ないんですが、
それにしてもあぁ悔しい……
でも場面分けによって作業がしやすくなって、頭が整理された訳なので
あの場面分けの作業は絶対必要なことだったんだと思います！ホントに！
思えばこの頃から、ことばをカテゴリー分けすること「自体」に
無理が出てきていたのかもしれません。
それを思い知るのは、もっとずっと後になってからになります。
それらの思い出話はこれから徐々にご紹介できると思います。

事例３では、汎用的な語彙の分類方法についての悩みが語られている。「タグ」をつけて分類する方法に出会う前だったので、カテゴリー分類の必要に迫られて決断しかねている様子がうかがえる[6]。さらに語りならではのため息やつぶやきを交えながら描く手法によって、執筆者の苦悩が手に取るように感じられる。

事例４：「使える」データベースへの挑戦：
「さらに分析の巻：すり合わせ(1)」より抜粋



重複して取り出されたことばをチェックして
削除する（重なりを消す）などです。

右の事例４は、イラストを得意とする執筆者による描写の一例である。データベースを構成するデータ作りの最も初期の段階の悩みがこの記事のテーマになっている。「資料から取り出したことばをデータベースに採用する必要があるか、項目語は単語単位か、それとも使用頻度の高い述語と組み合わせた句の形で提示するのがよいのか、それぞれのことばをどの場面に振り分けるか」ということに悩む開発者らの状況がイラストとともに描かれている。

4.4　日本語教師としての思い

このような「日本語でケアナビ」開発の基盤になっているものは何なのか。事例５には「日本語教師としての思い」が綴られている。

事例５：日本語でケアナビの「いま」:「今年一年を振り返る　はたんぼ」より抜粋

今、気になることは……
また、公開後、私が一番気になっているのは
実際に「日本語でケアナビ」を使っている人が
どんな風に使っているのか
自分たちが予測していた使い方と同じような使い方をしているのかどうかです。
それは、
どんな風に使っているのかを知ることができれば
ケアナビがもっと使い手にとって身近になるような
フォローができるのではと思っているからです。
さらに、
使い手にもっと必要なものがあるのか
私たちが作ったものが使い手のニーズに合っているのか
本当に必要な語彙があって、それが現場で実際に役立っているのか
調べたい語彙が、調べたい方法で簡単に調べられているのか
ということも知りたいと思います。
確かに形になった「物」は作りました。
そして
「現在何万人のアクセスがある」などというように
目に見える結果も知ることができます。
それはとても嬉しいんです。
でも私は「ケアナビ」をあくまで素材だと考えています。
その素材が、料理する側にとって
本当に魅力的なもので、
それがどのように料理されているのか、
そしてこの素材でもう一度料理してみたいと
思ってくれるのかが、作り手として気になっている点です。
「作って終わり」ではありませんから。

「日本語でケアナビ」を作るどの段階でも、開発者らの間で話題に上がったのは「使い手」つまり「学習者」のことである。学習者とは特定の人物を指すのではなく、開発者らが日ごろ授業の中で出会ってきた様々な学習者の群像である。「彼らがこのサイトを使うとしたら何が必要か、どのような使い方を提供すれば、彼らは迷わず楽しくサイトを使うか」など、語彙を採用する時も、デザインの工夫を凝らす時も、「日本語でケアナビ」を形作る概念作りに最も貢献してくれたのは彼ら学習者だった。同時に、学習者を支援する日本語教師や地域のボランティアの人々にとって、どんなケアの言葉が必要なのかを検討することも本プロジェクトの重要な要素だった。「教師としては、こんな資料があればうれしい」「このような形で提供すると授業で使える」と、日本語教師としての立場から自らの体験や要望を語り合った。そこからどのようなサイトを開発し提供すればよいか、教育の現場でどのように活用してもらいたいか、という共通理解を築いてきたのである。「日本語でケアナビ」の内容や機能はこのような日本語教育の実践そのものが基盤となって構築されている。それが事例５で語られる「『作って終わり』ではありませんから」という思いにつながるものなのである。

５．考察

5.1 「開発室ブログ」のもたらしたもの：「日本語でケアナビ」と「開発室ブログ」の評価

5.1.1 「日本語でケアナビ」の評価

「開発室ブログ」の実践から、「日本語でケアナビ」プロジェクトを以下のように評価できる。

１）「日本語でケアナビ」はインターネットサイト開発というプロジェクトであったが、そこには日本語教師としての日常的な学習者との係わりや経験の深い影響が見られる。

２）開発の過程ではトップダウン的な判断だけでなく（時にはそれも必要だったが)、問題解決に向けて担当者が縦断的（主担当：ある業務を主に１人で継続して担当する等）かつ横断的（協働的：ある業務を複数で担当する等）に関わり、それぞれ役割を果たしていた。

３）多様な専門分野に就く学習者に対する支援として、日本語教師は教室活動だけではない様々な関わり方（たとえばサイト開発など）が可能である。

４）３）を推進するためには、日本語教育の分野にとどまらず、広く関係領域の協力者との連携をとることが重要である。

5.1.2 「開発室ブログ」：語りによる仕事の現場の記述について

「開発室ブログ」では、読者にプロジェクトの状況をわかりやすく的確に伝えるために「語り」のスタイルを用いた。事実を客観的に伝える報告書と異なるのは、語りには伝える「わたし」が存在するということだろう。仕事の記述としての中立性、客観性を考えた時、それが妥当かという迷いもあったが、報告書に記載しきれないものが、語りの記述によって可能になることもある、あるいは現場の問題点を描くには、語りというスタイルをとらなければ難しい一

面もある、と判断し、それを実行した。「開発室ブログ」の語りを通して、以下の点が明らかになった。

1）データ作りを実際に行ってきた担当者による開発過程の記述により、プロジェクトの中における担当者の役割を確認することができる。

2）プロジェクトに関わった当事者同士であっても、互いにどのようにプロジェクトを捉え、どのような思いで取り組んでいたのかを知ることは難しい。ブログのエピソード記述のように、出来事を複数の視点から描くことにより、その理解とノウハウの共有を促すことができる。

3）詳細なエピソード記述には、その場の問題点やねらいなど、プロジェクトの核心が表現される働きがある。

4）「語り」の文体を用いることで、その場に関わった人々の「思い」を伝えることができる。

5）仕事の場を記述することにより、プロジェクトの価値を確認することができる。

6）日本語教育という文脈において、本プロジェクトの意味を考えることができる。

5.1.3　ブログという手法の評価

1）ブログは「仕事の場」を多角的、多声的、視覚的に描くことができるメディアである。

2）ブログの双方向性、同時進行性を生かすことで、記述は過去の出来事に留まらない。

3）ブログは多彩な文体を許容できるメディアなので、書き手の個性を生かすことができる。

5.2 「開発室ブログ」の問題点

仕事の場を振り返り、プロジェクトを評価するもうひとつのツールとして、「開発室ブログ」は一定の評価を与えられると言えよう。一方、その実施について問題がなかったわけではない。

1）仕事の場を描写することはそれほど容易ではない。読者に訴えられるものにするためには、「語り」のスタイルに応じた記述、メディアに応じた技法など、書く技能が要求される。

2）ブログに関わらず、実践現場を描くことは手間ひまのかかるものである。決して仕事の傍らにできるものではない。従って、その実践のためには仕事の中での位置づけが必要である。

3）プロジェクトの評価において、「語り」や「記述」は重要なものであることは確認できた。しかし、それだけで「評価」とするには無理がある。アクセス解析に代表される数値的評価も同時に重要である。理想的にはそれらを含む多角的な評価が実践されるべきだろう。

6．終わりに

「開発室ブログ」の目的は、開発者ら自身がプロジェクトの価値を評価し、それを開発した日本語教師としての自分たちの仕事の価値をどう受け止めるか、ということだった。また、プロジェクトチームのお互いが、どのように課題に取り組み困難を受け止めてきたのかということを共有することだった。1.で述べたように、筆者は「実践者として仕事の現場におけるエピ

ソードを記述したいという願望」を抱いていた。そこには以下のような視点がある（鯨岡2005前掲）。

1）現場は多様な「人の生の実相」が体験される場である。

2）固有名を持った特定個人の生の断面を日々記録し、それを積み重ねることで、その人の人物像を手ごたえあるかたちで描き出したいという願いがある。

3）担当者が関わる中で捉えた人物像と、アセスメントなど既成の評価規準で捉えた人物像とのあいだには、しばしば大きなギャップがある。

4）エピソード記述は体験の「意味」へと向かい、新たな問いを立ち上げ、他者と「意味を」共有することへと向かう。

「『日本語でケアナビ』開発のノウハウとは一体何だったのか」、それを明らかにするために、ブログを通じてプロジェクトの身近にいる人が、自らの経験を振り返り、語り、記述してきた。この実践から、我々はその経験を日本語教育の文脈に根ざして理解することへと導かれていった。現今、日本語教育の現場に寄せられる要望は日々多様になり、日本語教師の資質として問われるものはさらに複雑になってきている。IT環境の発展はますますそれに拍車をかけているが、「日本語でケアナビ」開発とは、まさにその渦中での出来事だったと言えよう。

開発された「日本語でケアナビ」というサイトはもちろん知的創出物であることに違いない。が、それを開発してきたプロセスにも、もうひとつの知的財産があったと自負している。それが何であるかを明らかにし、今後も様々な要求を突きつけられるかもしれない日本語教育に従事する人々と分かち合いたいという願いが、本稿の目的であった。それが果たせたかどうかはさておき、今は「開発室ブログをやってよかった。」という思いでいる。

現場の記述による当事者評価を行うことは、社会的文脈における日本語教育プロジェクトの価値を自ら認識するための一つの方策だと言える。この評価によって、日本語教育から多様な領域に対して〈何を、どのように発信するべきか〉が明確になる、と言えないか。これは本実践で明らかになった大きな命題である。仕事の場の記述と、その手法としてのブログの可能性を〈当事者自身によるプログラム評価の手法〉として主張するには、さらに検証を深める必要がある。そこに、「語ること」によってどのような経験がノウハウとして共有されていったのかを明らかにすることを加え、今後の課題とする[7]。

〔注〕

[1]「日本語でケアナビ」〈http://nihongodecarenavi.jp/〉

[2]「日本語でケアナビ」の報告書としては、以下を参照されたい。

上田和子（2006）『看護・介護のための日本語教育支援データベース―開発調査報告書―』国際交流基金

関西国際センター

上田和子（2007）「『看護・介護のための日本語教育支援データベース』開発調査をめぐって」、『国際交流基金日本語教育紀要』第３号、183-190、国際交流基金

上田和子・田中哲哉・前田純子・嶋本圭子・角南北斗（2008）「インターネットサイトによる日本語教育支援―「日本語でケアナビ」の開発と一般公開を事例として―」『国際交流基金日本語教育紀要』第４号、169-176、国際交流基金

(3)「日本語でケアナビ」開発メンバーは日本語教育専門員の上田和子、田中哲哉、非常勤講師の前田純子、嶋本圭子、角南北斗とアシスタントの下平菜都子の６名で「開発室ブログ」執筆者でもある。独自性をもったブログを開設するには専門的な知識を要するが、ブログ設計など文字通りディレクションを示してくれた角南北斗講師という存在があったので、他のメンバーは記載する素材（記事や挿絵）準備に集中することができた。これは「日本語でケアナビ」開発を通して挙げられる好条件の一つであった。開発ブログのきっかけを与えてくださったのは、国際交流基金日本語事業部、勝賀瀬麻里職員だった。また、このブログの実験は関西国際センター、正野圭治研修事業課長、鈴木玲職員、四ツ谷知昭職員のプロジェクトに対する寛大な理解がなければ実現しなかった。日本語教育プログラムを支えてくださる献身的なスタッフ各位に深謝申し上げる。

(4)「こちら「日本語でケアナビ」開発室」〈http://nihongodecarenavi.net/blog/〉

(5)2008年３月、国際交流基金関西国際センターでは「日本語教育シンポジウム　ひらく・つなぐ・つくる　日本語教育の現場」を開催した。パネル・ディスカッションでは「日本語でケアナビ」開発を事例として「『日本語でケアナビ』と実践的コミュニティー」が行われた。それに先立ち、データベース開発における日本語教師の視点をブログで公開し、当日議論すべき問題点を事前に参加者に届けることをねらった。「開発室ブログ」のもう一つの働きは、シンポジウムを継続的な時間の中でリフレクトするための役割を果たすことにもあった。

(6)「タグ付け」の詳細は注２に示した文献、上田（2006）、上田他（2008）を参照のこと。

(7)「こちら『日本語でケアナビ』開発室」ブログのアクセス解析も実施しているが、それによると、公開以来、爆発的な数値ではないが、開発者ら関係者以外に一定数のリピーター読者を確保していることがわかる。また記事が他のブログ主催者に引用され評価されている事例も見られる。

〔参考文献〕

ウェンガー，エティエンヌ、マクダーモット，リチャード、スナイダー，M．ウィリアム（著）、櫻井祐子（訳）（2002）『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社

梅田望夫（2006）『ウェブ進化論―本当の大変化はこれから始まる―』ちくま新書、筑摩書房

鯨岡　峻（2005）『エピソード記述入門』東京大学出版会

グリーン，C．ジェニファー（2006）「評価による社会的プログラムの理解」、デンジン、N.K.、リンカン，Y.S.（編）平山満義（監修）『質的研究ハンドブック３巻　質的研究資料の収集と解釈』北大路書房

角南北斗（2008）『「日本語でケアナビ」アクセス解析報告書』国際交流基金関西国際センター

IT用語辞典　〈http://www.ntt.com/bizit/dictionary/〉（2008年９月29日）

国際交流基金ブログ「地球を、開けよう。」〈http://d.hatena.ne.jp/japanfoundation/〉